

詠む広場

毎日俳壇

片山由美子選

日向ぼこあの世この世の入り交じり

横濱市 瀬古 修治

△評▽ぽかぽかと温まってきて、

いつのまにかうとうと。亡くな

ったはずのひと生きている人が一

緒に現れたのかもしれない。

手袋の指よりこぼれ五円玉

福島 渡辺 俊子

△評▽手袋をしたままで五円玉

をうまくつかめなかったのだ。1

00円玉や10円玉との違い。

人込みに妻見失ひ初詣

河内長野市 田中 清司

大方は同じ長さの軒水柱。

広島市 谷口 一好

唄ひつつ絵をかかあそび梅真白

平塚市 高橋 佳代

電源のすべてをオンに初仕事

岐阜市 水上れんげ

大き夢小さく書かれ年賀状

水戸市 永井 弘子

図書室の机に残る革手袋

和歌山 桑原 里美

和室からおかきの香の大晦日

大洲市 坂本 梨帆

名画座の重たきとびら虎落笛

千葉市 青山希久子

小川 軽舟選

冬麗や港見晴らす風見鶏

芦屋市 瀬々葱坊主

△評▽晴れた海から港町へ風が吹

き渡る。その風に向かって屋根の

上に立つ風見鶏の視点で作者も港

を見晴らすのだ。

海原と別れ枯野へ機首下ぐる

仙台市 引地 恵一

△評▽着陸間近の飛行機から下界

を見下ろす臨場感。海原と枯れ野

の色の対比が印象的だ。

白鯨のごと海上に寒気団

鳥取 馬野慎一郎

誰一人乗らぬ駅あり冬銀河

奈良市 浦城 亮祐

ごつごつと冬田を渡る鳥の影

北本市 萩原 行博

ガラス戸を昇る朝日や冬あたたか

小田原市 林 梢

探鳥や重ね着脱いでまた歩く

羽生市 岡村 実

寒橋の後のサイレン窓過る

川口市 渡辺しゅういち

唇の僅かに動き冬の虹

葛城市 久保 政子

童の玉雲ひとつなぎ空つつく

いわき市 織内あさ陽

西村 和子選

我が影の石に貼りつく寒さかな

加須市 野口 勇一

△評▽動きも凍りついたような寒

さを、具体的に描写した句。切り

抜いたかのごとききわやかな冷え

まった影が見えてくる。

眠る間も育つ赤子や軒水柱

北本市 萩原 行博

△評▽日々育つ赤ん坊と、いつの

間にか太るつららの響き合い。

温かい室内と極寒の屋外の対比。

雪しまき千切れそうなる安全旗

東京 石川 昇

霜柱踏みて集ひし朝の弥撒

尾張旭市 古賀勇理央

湯豆腐や人の話の輪に入らず

岡山市 三好 泥子

働かぬ指細くなり冬ごもり

東京 時田佐代子

初晴や渚つたひに岬まで

那須塩原市 谷口 弘

戸を繰れば我を待ちをり初雀

春日市 林田 久子

大利根を遡り来し冬鷗

千葉 阿部 尚子

黒潮の風の届きてみかん山

和歌山 馬谷富貴子

井上 康明選

一塊のくろがねとなり山眠る

久喜市 利根川輝紀

△評▽寒気のなか、山々は黒い影

を帯びてすっしりと座っている。

冬の日が落ちて、あたりがすこし

ずつ暗くなってくる頃だろう。

帰りに来る僧の作務衣に焚火の香

久留米市 持地 恒美

△評▽境内で落葉をたいてきた僧

の作務衣から、焦げ臭い匂いがす

る。寺院の冬の一場面。

歴史には血の匂ひあり春の雪

東京 野上 卓

冬の月自転車に鍵さしたまま

町田市 枝澤 聖文

千変の風紋伯書富士眠る

加古川市 伏見 昌子

師恩なほ龍太全集読始

富士市 後藤 秋邑

餅の花座敷童は紅が好き

南房総市 山根 徳一

空はまだ雪を蔵せり青々忌

宇陀市 泉尾 武則

地球といふひとつのいのち初日の出

高知 渡辺 哲也

歯みがきの香のびししと寒の星

相模原市 小山 鞠子

ことばの五感

常夏の国の雪

川野里子

・手の卵春のひかりのせせらぎをあつめ
て鳴れり七雪ののち 佐竹彌生
(歌集「雁の書」)

2月とはいえはむ暑さのシンガポ
ルで、分厚いセーターを着たマネキン
に出会ったことがある。歩き疲れ、涼む
ためにデパートに逃げ込んだときのこと
だ。きつくりとしたエアコンの風が全身を
冷やす。これがサーピスなのかと思ひな
がら歩いてみると、白熊の模様を編み込
んだ分厚いセーターを着たマネキンに出
会った。毛糸の帽子をかぶりスキーを担
いでいる。一体誰がこれを買うのか？

常夏の国の人にとって雪とは何なのだ
ろう。近年日本に雪を見に来るツアーも
あるらしいが、彼らの憧れは雪を新しく
し、「雪の降る国」という世界を新たに
創り出す。しかし、思えば雪の国である
日本もその世界を豊かに言葉で作り出し
てきた。「七雪」とは彼岸過ぎに降る雪
のことだが、この名を与えられた雪はず
でに物語の世界を降っている。

粉雪、粒雪、綿雪、水雪、硬雪、さらめ
雪、水雪という言葉がある。太宰治は小
説「津軽」でこれらを「七雪」と呼んだ。
雪と闘い共に生きる人々の生活の言葉
だ。それぞれの名には雪との共生の歴史
が秘められている。粉雪はしんと積
もり、水雪は重く屋根を拉ぐ。7種類の
雪が降り尽くし、心身が雪の重みで押し
つぶされそうになる頃やと春が来る。
私がセーターを着たマネキンを見てい
ると、通りがかりの子供がその足元に置
かれていた発泡スチロールの玉に触れ
「雪だー」と叫んだ。
(かわの・さこー歌人)